佐用郡産蝶類及び天蛾類の採集の栞

井　口　宗　平

小生も久しく昆虫の研究から遠ざかつて居りますが室井氏から「兵庫生物」に何か書けとしきりにいわれる故、古い記憶を呼びおこして、せめて蝶類の事だけでも記述して見ましよう。何しろ四十年も以前の事ですから近頃どんな方が如何な研究をされたやら一向知らずに居ますから皆目不知案内の昔語りに過ぎません。

かつて名和昆虫研究所發行の雜誌「昆虫世界」に佐用郡産蝶類目錄を發表しましたが、其の雜誌も今は手許になく正確な数もわかりませんが、確か八十二、三種が佐用郡に産する筈です。

一、鳳蝶科　　アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、オナガアゲハ（稍少ない）は其の幼虫の食草なる柑橘類、サンショウ、フユサンショウ等に來て産卵しているからこれ等の樹の周辺を注意すると成虫のみならず幼虫や蛹をも発見出來るからそれを持ち帰つて小さな飼育箱に飼育すると完全な標本が得られる、越冬した蛹は四月中旬頃、春型小型の蝶が出る、又蝶が出ないで、アゲハヤドリバチという姫蜂科の寄生蜂の出る事もある。ジャコウアゲハはウマノスズクサを食うから此の草の群生する堤等の辺には、よく飛んでいる。又其の幼虫や蛹（オキクムシ）も探せば獲られる。アオスジアゲハは樟、タブノキ等の害虫であるが、翅が非常に速くて捕獲しにくい。キアゲハはニンジン、ヤブジラミ、ボウフウ等を食うからこれ等の食草の附近によく飛んでいる。キアゲハの幼虫は非常に複雜な色彩を持つている。アゲハチョウ類は大形で尾がいたみやすいから、かるくすくうてアミの中で翅の表面を内にしてたゝませ胸部を指先で爪をたてゝおしころし採集箱に針でとめるのです。百合、サンショウ、センニンソウ、クマツヅラ等の群花へはこれ等の蝶がよく來て花蜜を吸うものである。又路上屋辺の水溜りや牛馬糞等へ來る事もよくある。モンキアゲハは本郡では一回見た限りで中々とれない。ウスバシロチョウは西庄村の西大畠と小日山と両部落の近辺山裾の草地にだけ、五月下旬から二週間ばかりの期間発生する（石井村にも出る様に思うが確信がない）これは翅の弱い蝶で午前中無風の時山裾をヒラヒラと沢山とんでいるから、三、四十羽位わけなくとれる。丁度岐阜市の郊外金華山の裏に特産するギフチョウと共通した性質のものであります。

二、粉蝶科　　モンシロチョウ、モンキチョウ、スジグロチョウ、キチョウ、ツマグロキチョウは普通のもの故採集も容易であるが、ヤマキチョウは成虫で越年し、早春温暖の日にはヒラヒラと出て來ること、キチョウと同じである。又九、十月頃ソバの花にはよく來る、ツマキチョウは山地に四月中旬頃から沢山出る。

三、斑蝶科　　アサギマダラ一種だけ、それも小生は一回一羽限り採集したのみ。

四、蛺蝶科　　ヒオドシチョウ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、ルリタテハは越冬する故早春暖日には採集する事がある。ヒメイチモンジチョウの春型は実に美麗である。西庄村小日山の部落から二十丁ばかり奥へ行くと五月頃、これが無数に群飛している。ホシミスジチョウは高倉山（久崎町と佐用町との境）の北側中腹一、二カ所に七月頃に限り出現する。ミスジチョウは我が久崎町櫛田飛龍の滝の六、七丁下流に七月頃に限り少しだけいる。ヒョウモンチョウの類は六月頃千種川原

に沢山発生して、絢爛な其の翅を初夏の陽炎に煌めかす。又アゲハと同じく路上の水溜や屋辺や牛馬糞等に來る。メスグロヒョウモンは秋季ソバの花でよくとれる。スミナガシ、コムラサキ、ムラサキチョウ等は久崎町下秋里、長野の滝の下流山林によく居る。楢櫟の天牛の幼虫による虫孔の樹液によく集まつている。此の樹液はアルコールの様な強い臭氣を放つから、これ等の蝶の外、クワガタムシ、ヤマバチ、コガネムシの大形種、糖蛾類等もよく集まつている。ゴマダラチョウ、ヒオドシチョウは榎の害虫であるから、六月には葉に蛹がぶらさがり、梅雨の晴間等には目も綾な新しい蝶が出て來る。キタテハは河辺のカナムグラによく居る。幼虫はその害虫であります。

五、蛇目蝶科　ジヤノメチョウ、ヒカゲチョウ、キマダラチョウ、コジヤノメ、ウスイロコジヤノメ、クロヒカゲ、ヒメウラナミジヤノメこれ等は普通どこでもとれる。キマダラモドキは前記長野の滝の下流の池のほとりにだけ見られる。ヒメキマダラは本郡に隣接せる行者山（岡山縣英田郡東粟倉村）の中腹海拔七、八百米位の地点でとれる。ウラナミジヤノメ、ヒメヒカゲは七、八月頃久崎町内でも折々とれる。

六、小灰蝶科　ベニシジミ、ツバメシジミ、ヤマトシジミ、シジミチョウ等は普通のもので路傍でも屋辺でも採集出來る。ヤマトシジミに似たゴマダラシジミの幼虫は笹の葉の貝殼虫（白蠟を分泌して眞白く見える）を食するのであるから此の貝殼虫の寄生している笹を注意すれば、幼虫も蛹も蝶も採集出來る。オオシジミチョウ、ウチムラサキシジミは七月頃山林で稀にとれる。ウラナミシジミの幼虫は小豆、インゲンマメ等を食害するから、それに注意すればいくらでも採集出來る。後翅の細い尾をいためぬ事が大切である。キマダラルリツバメは稀品である。かつて名和氏の採集人高見筆太郎氏が久崎町で二羽採集したぎり、小生はまだとつた事はない。ツマグロアカツバメ、ウラナミアカツバメ、アカツバメチョウ等は折々雜木山の林梢高くとぶので採集困難な種類である。クロシジミはミスジチョウと同じく高倉山の北面に限り棲息する、ウラギンシジミは蝶で越年する。夏秋の頃山間の水たまりの辺へ沢山集つている事がある。ルリシジミ、コツバメは早春発生する。前者の幼虫はカシの葉を食う。

七、天狗蝶科　テングチョウ早春からいつも、ぽつぽつ発見される。

八、挿蝶科（セセリチョウ）　イチモンジセセリは稻の害虫で、ハナセセリはこれによく似ているが後翅の白斑が一列に正しく並ばずに犬牙狀をなして居り、笹の葉を食う、チャマダラセセリも中形で珍らしくない。アオバセセリは此の科中、最大形種で翅が迅い。ニンジンの花へよく來て蜜を吸うでいる。ダイミョウセセリは六月頃から秋迄、始終山道で採集出來る。チャバネセセリ、コチャバネセセリ、キマダラセセリ、コキマダラセセリ、ヒメキマダラセセリ、クロスジセセリ等小形種いろいろ櫛田の滝、長野の滝、小日山等でよく採集したものである。

天　蛾　類

佐用郡にも24～25種は產すると思うている。ユウガオベツトウの別名の通り、夕暮方に活潑にとびまわつて、マツヨイグサ、オオマツヨイグサ、ユウガオ、クチナシ、チョウセンアサガオ、クサギ、カワラナデシコ等の花から花へ、とびまわつて其の特有の長い吻を長い花管にさし入れて花蜜を吸いブウブウと鈍い翅音を立てるから、其の時刻が一番採集の好機会であるが、捕虫網からうまく、毒ビンに入れて殺し、早く採集箱に針でとめないと鱗粉が剝落して種類の鑑別が困難になる。何しろ飛翔が活潑であるから自己の運動によつてすでに翅粉のはげているものが多い。かつて名和

氏が天蛾類の図説をこしらえられた際は、一々幼虫を採集して飼育し蛹から羽化したものを標本にして原図をつくられたものです。スキバホウジヤク、ヒメホウジヤク、ホウジヤク、コスカシバの類は日中にもよく花へ來ている。ウチスズメは内雀という意味であろう、燈火を親うてよく屋内に來る。其の他クロクモスズメ、シモフリスズメ、エビガラスズメ、メンガタスズメ等もよく火に來る。天蛾は蛹で土中に越冬するから各種のイモムシを其の食草で飼育し底に土を一寸ばかり入れておくと其の中へ入つてうすいマユを土でつゞつてつくり其の中で蛹化する、土がしめらぬ様に注意して越冬させると五、六月頃、それぞれ羽化して完全な標本が得られる。普通天蛾類の食草を挙げて見ると

エビガラスズメ	甘　藷	クロクモスズメ	ブドウ
メンガタスズメ	胡麻、茄子	ヒメホウジヤク	ヘクソカヅラ
シモフリスズメ	キリ、クサギ	ホウジヤク	カワラマツバ
クロスズメ	松	ベニスズメ	カワラマツバ、マツヨイグサ
モモスズメ	桃、櫻	キイロスズメ	ヤマノイモ、オニドコロ
オオスカシバ	クチナシ	コスズメ	ブドウ
クルマスズメ	ブドウ	セスジスズメ	サトイモ、ハンゲ

ついでに採集地の案内をしておきます。山陽本線上郡駅から、バスで三十分久崎で下車すると、それより谷へは西南二十丁、櫛田の飛滝へは約二十丁（東方）又久崎の次の円光寺でバスを下りれば西南約十五丁で下秋里、長野につきます。長野の池から滝まで約十三丁あります。キマダラモドキのいるところです。円光寺の次の上月（姫新線上月駅）でバスを下車すれば西庄村で、西大畠迄約一里、そこから小日山を経て大日山部落に（此の間約四十丁）通ずる谷川沿いの林道や、支流の谷々は植物も豊富で昆虫の採集におもしろいところです。五月下旬から六、七月は一番好季節であります。又九月末頃、ツリフネソウの満開期にも隨分おもしろいものがとれる。

（第45頁より続く）

佐藤先生は瀧川高校（旧瀧中）在職、旧博物学会当時の設立者兼幹事として大いに動かれました。生物学会の今日あるのは全く、同先生等の御蔭で御座います。

室井生

⑥ 六甲から三宮に走るバスを五毛で捨てゝ北に登る事約一粁半、Canadian School のすぐ上の墓の一つに、はつきりと木の肌と年輪とを示している直徑30糎に及ぶ化石らしきものがある。路傍に忘れられた宝ではないだろうか。　松陰女学院　武智芳美

⑦ 生活の科学Ⅲの p49, 3生殖細胞のでき方の5行目に「…2回の減数分裂をへて4個の精子ができる。」と述べてある。これでは生物の染色体数は受精を経て発生しても代を重ねる毎に半減する。もつとも同 p.48 の第10図の説明より判断し得るがちよつと読むと不審な氣持を起させる語である。　市立湊川高　横山章

⑧ 左巻と右巻、アサガオは蔓を左に巻きます。これと同じ方向に巻いた貝は右巻きといゝます。動物と植物とで正反対はおかしい、統一は出來ないものでしようか。　兵庫高　室井綽

⑨ 蝸牛をガラス器に飼つて日蔭を造つておくと、活動する時は明るい方へ、休止の時は暗い方へ集る習性が認められる。吾々人間が醒めている限り明るさを求め、就眠の際は消燈するのと似通う所があつて面白い。　神戸市神樂小　古川博二